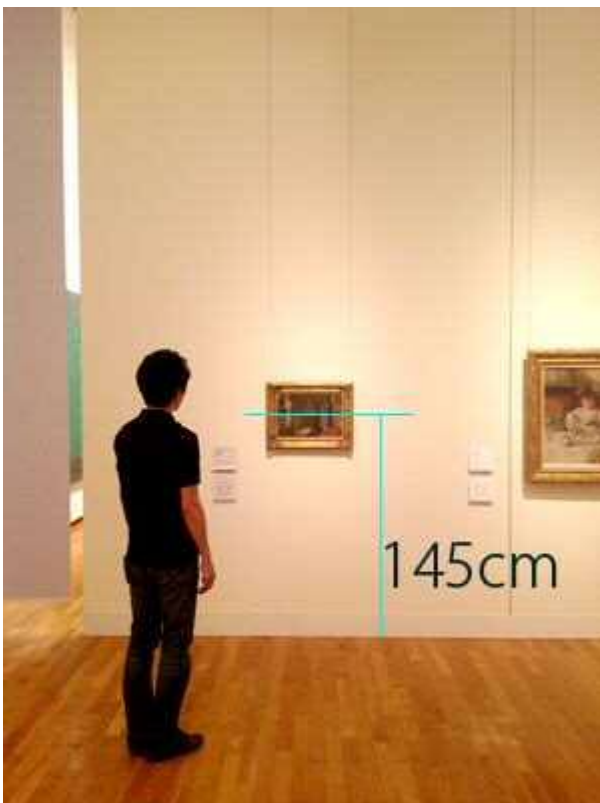


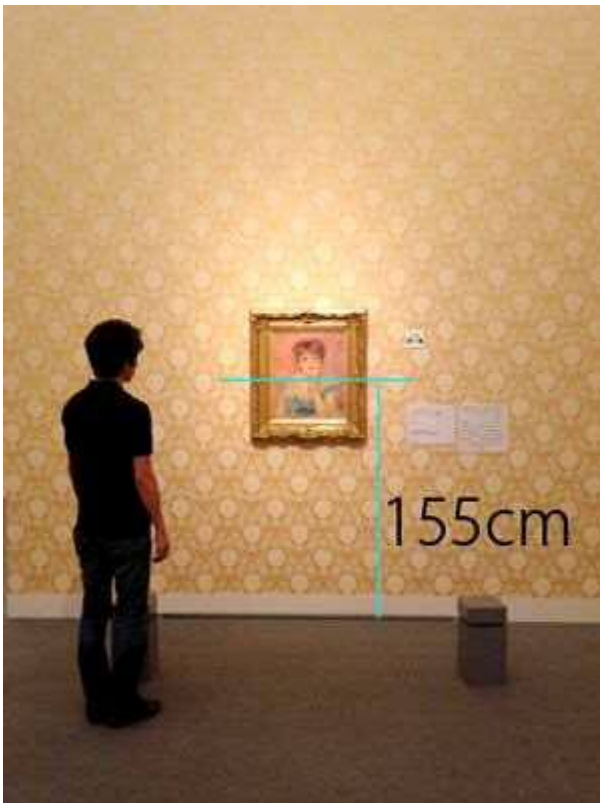
「展覧会で絵を展示するとき、高さはどうやって決めるのですか？」というご質問をいただくことがあります。

私たちはそれを、絵の中心が床からどれだけの高さになるか、ということを考えて決めるようにしています。そして、多くの展覧会ではこの高さを145cmか、150cmとしています。これは、作品を鑑賞される皆さんの平均的な目の高さから導き出されたものです。



ただし、事前に混雑が予想されるような展覧会だと、作品の前に二重、三重に人が立っている状況でも見やすくするために、普段より少し高め、例えば160?くらいの高さで展示することもあります。このようにして展覧会ごとに高さを決め、それを基準に作品の展示が行われます。しかし、ある展覧会に出品されるすべての作品を同じ高さで展示すればよい、というわけでもありません。例えば、高い山や建物を見上げるような位置から描かれているような、高さが強調されている作品の場合は、他の作品より少し高めに展示することもあります。

現在開催中のプーシキン美術館展では、普段よりちょっと高めの 155cm を基準にしています。それは、会場が混雑したときにも、少しでも皆さんに作品をご覧いただきやすいように、ということを考えているからです。ただ、高ければよいというものでもなく、これ以上高く展示してしまうと、絵によっては見づらくなる可能性もありますので、少し高めの 155cm、なのです。ルノワール《ジャンヌ・サマリーの肖像》も、もちろんこの高さで展示してありますから、この絵の前に立つと身長が 180cm ほどの、ちょっと背の高めな女性と対面しているような印象になるかも知れません。



ところで、プーシキン美術館展の会場には、1 点だけ 155cm より高く展示している作品があります。ご来場いただいた方は、お気づきになったでしょうか？ひょっとすると気付いていただけないかも知れませんが、それはむしろ、展示についての私たちの工夫がごく自然なかたちで皆さんに受け止められている、という証でもあります。展覧会の会場を、作品の配置はもちろんのこと、ディスプレイも含めてどうやって構成するか、そしてまた、絵の大きさや構図などにも配慮して絵の高さを決めていく作業は、学芸員の腕の見せどころといえましょう。

(MM)